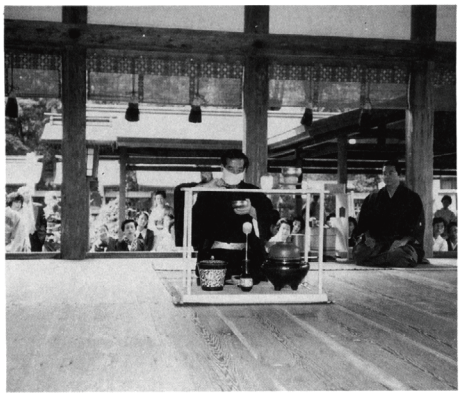
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311㈹
定価 一年送料共 1000円

神具・装束
結婚式場用品
福岡店 福岡市博多区東公園二－三一（〒812）
電話（092）九五一－九五六八番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話 京都（075）三一三四（代）～四番
株式会社 井筒

献茶祭斎行

第十四代表千家家元
而妙斎千宗左宗匠奉納



茶の道を志す人々にとって待望の行事、第十四代表千家家元千宗左（而妙斎）宗匠御点前による奉納献茶祭が、十月十七日当大社本殿に於て厳粛裡に執り行われた。

この献茶祭は昭和三十七年十月、当時の宗像大社復興期成会々長出光佐三氏の御尽力により、神嘗祭の佳日を選び、第十三代表千家家元・即中斎千宗左宗匠の奉納が実現したもので、以来恒例の行事となっており今年で第二十七回目となる。

少し肌寒く感じられたが、まますます好天に恵まれ、神木の梢の葉も僅かに黄色に染まる初秋の境内は、九州山口各県から家元の御点前を間近に拝見しようと早朝より続々と参集、拝殿周りに特設された椅子席はもとより、立見席迄立錐の余地もない程拝観者で満ちあふれた。

定刻午前十一時、大太鼓を合図に宗像囃宜以下神職が斎館より参進、表千家家元、出光興産株式会社々長出光昭介氏外役員、九州同門会々長外幹部役員は勅使館より神職先導によって参進、合流の上祓舎にてお祓を受け、拝殿に昇殿した。

斎主・宗像囃宜が、千利休より宗湛、宗左と引継がれた不審庵表千家四百年の弥栄と、「和敬静寂・清浄礼和」の茶道の本義を心に銘じ、斯道の発展に精進し、文化国家の建設に寄与されるようにとの祝詞を奏上した。

続いて献茶の儀が行われ、拝殿にしつらえた風炉の前で、家元の一糸乱れぬ斯道最高の見事な袱紗さばきが披露され、多数の拝観者はかたずをのみ、真剣なまなざしで見守った。

杜頭にしばし静寂の刻が流れる中、金箔の茶碗に濃茶、銀箔の茶碗に薄茶がたてられ、三管の流暢な調べにのって厳かに御神前にお供えされた。

そして家元、出光昭介氏と次々に玉串拝礼が行われ、約一時間に及ぶ祭典は終了した。

又、儀式殿には出光席、斎館には九州同門会の副席が各々設けられ、参加者は秋の一日を心静かに茶の湯の醍醐味を満喫し、両副席会場の一角に展示してある茶器並に軸物等の名品、秘蔵品に目を楽しませた。

かくして秋の一大行事も盛大裡に無事終了し、秋が深まりを見せるのである。

古式祭のご案内

古式祭とは、今年最後の収穫感謝祭のことです。氏神様へ一年間の神恩を感謝して今年の収穫物を捧げ、忌火で炊いた御飯をお供えし、氏子の人達が一緒にいただく神事です。

この神事は、宮中に於て陛下が神嘉殿にて新嘗祭を行われておられるのと同じ性質のものです。

この古式祭は又「延命招福」の集いともいわれますが、氏神様と共にこの一年間の喜びを分ちあうといった「神人和楽」を共にする、年に一度の集会であることに意味があります。

八百年以上の伝統を持つ宗像大社の古式祭には、特にお果子と呼ばれる、九年母、菱餅等で作られた特殊神饌や、江口の浜よりあがるゲハサモという海藻をお供えして、お神酒などが授与されます。又くじが行われ、翁面・御神盃などが授与されます。

今年は平成の御代初めての、又来年秋には天子一代に一度の新嘗祭「大嘗祭」が行われます。このよな意義深い年最後の収穫感謝祭である古式祭に、是非とも皆様方お誘い合せの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

記

一、日　時　十二月十五日（金曜日）
　　祭典　午前六時
　　お座　午前六時三〇分～午前九時
　　祭典　本殿　お座　清明殿
一、場　所
一、お座料（一名分）　白米一升又は金五百円

文語の意義

一月九日「即位後朝見の儀」が行われ、天皇陛下は国民の代表を前にしてお言葉を述べられた。それは語りかけるような平易な話し言葉であった。二月二十四日には、昭和天皇をおくる「大喪の礼」が行われ、葬場殿において、御誄を読み上げられた。これも、御心のこもったものであったが、文体は口語文であった。

明治天皇、大正天皇、昭和天皇の「践祚後朝見の儀」の勅語が文語であったことはいうまでもない。明治天皇、大正天皇の御大喪において新帝がお読みになった御誄は、伝統の文体にもとづいた文語であった。新例というべきであろうか。しかし、天皇陛下のお言葉が口語体になったのは、この度が初めではない。昭和天皇も、戦後は、国会開会式のお言葉、国民体育大会開会式のお言葉、全国戦没者追悼式のお言葉にその他各種式典のお言葉に、口語体の言葉を用いられている。先帝の例に倣はれたものというべきであろう。

とかくの批評はさしひかえなければならないが、御一代に一度の大儀におけるお言葉が伝統を踏まえないでよいものか、慎重な考慮が必要であろう。国民にたいするお言葉が、親しみをこめて平易な口語体であるのはよいとして、神霊に告げたまう御誄までもがそれでよいかについては問題がある。来年秋には、御代最大最高の儀式が行われるが、祭儀の内容もさることながら、どのような儀式言葉が使われるかについても、深い関心がある。

○

このように、最も伝統を重んじられる皇室においても口語体が行われているが、民間における口語化はさらに進んでいる。皇室言語の口語化は民間の口語化の現状に合わせられたとも解することができる。今日、文語体で日記や手紙を書く人は絶無にちかい。文語が使用される場面といえば短歌や俳句ぐらいなものであろう。その最後の文語文ともいうべき短歌の世界でも、『サラダ記念日』のような話し言葉をいかした短歌が擡頭してきている。

確かに口語の言語空間は広がり、文語の言語空間は極端にせばめられつつある。われわれはこの現状を率直に認めなければなるまい。しかし、ここで考えておかなければならないことは、文語の言語空間の狭窄は文語の存在意義の消失を意味するものではないということである。文語が日常語でなくなったことは人々の暮らしに新しい意義をもたらしている。

日々の暮らしは日常性に埋没していても、人には日常性を超えたいという願いがある。そのようなとき、文語は日常語でない故にその願いを満たすことができる。短歌で依然として文語が主流であるのは、文語には口語にはない調べがあるということもさることながら、文語が日常語でないということも大きな理由と考えられる。また、人生の折々には厳粛・緊張の要求される場面がある。神事や儀式において文語は日常語でない故にそれを満たすことができる。

文語の存在意義を説くことは、口語の言語空間を侵略し失地を回復しようという意図にもとづくものではない。それぞれの存在意義を認め合い、その共存こそ望ましいとするものである。共通語と方言の共存が言語生活を豊かにしているように、口語と文語の共存も言語生活を豊かにする。それだけではない、文化を豊かにするものである。

そのことを理解しない、一方的な口語化に対しては多少戦闘的にならざるを得ない。

○

神社界は日本の社会のなかで最も文語に関係の深い所である。祝詞は最も古い文語である。記紀等の古典をおいて神道を語ることはできない。また神職には和歌・俳句をたしなむ人が多い。従って、文語の存在意義については他とは異なる格別の理解があるはずである。祝詞の口語化を言い出すものはないようであるが、口語聖書や口訳仏典に倣った口語化にたいしては大きな警戒を要する。それらと神道とは全く伝統を異にする。人に説く言葉なら口語でもよいが、神々に申し上げる言葉は、古来神々が聞き続けてこられた言葉でなければ、神々も受けられまい。

（神社新報より）

余滴

あるデパートの地下食品売場で催されている地元酒造場の宣伝試飲会。通りすがりにお嬢さんから渡されたのはプラスチックの透明なカップ。琥珀色の一杯をつまみ迄用意されて、美味しく御馳走になった。飲み終りカップを返却すると、お嬢さんこれを無造作に段ボール箱にポイ。ガラスコップにも似た美しいデザインだったので、「このカップはどうするの」と余計な事を尋ねた。「捨てますけど、御入用ですか」とにこやかな答え。

玄界灘に浮ぶ神の島、沖ノ島周辺は、暖流と寒流が交じわる一大漁場である。このため、同島の岩礁に連日多数の釣り客が訪れる。また沖ノ島漁港が一級の避難港なので、韓国の漁船、貨物船が寄港停泊する。これ等来島者が、使用済みのビニール袋、プラスチック製品を海中に投棄するため、汀に白い廃棄物が漂着し、勤務する神職が時折海岸を清掃している。

洗えば又使えるカップでもさっさと捨て去る浪費生活？が全国に蔓延し、絶海の孤島に於てもポイ捨ては変る事がない。

国内で出版される一日の書籍を積み上げると富士山の何倍にもなるというから驚きだ。大量生産とその消費は、また多量のゴミを排出する。東京湾の夢の島が満杯になり、第二第三の夢の島が必要だという。

資源は無限ではない。もったいない、有難い、生かされているという日本古来の生活信条に逆行する、過剰な消費を改める事が、今肝要なのではあるまいか。

第三四一回 宗像大社歌会詠草

中村吾郎 選

毎月末日〆切

大島　目原　節子
夕茜映えてしずもる沖の瀬に先着の鷗安らぐが見ゆ
（評）シベリア辺りから遠い道程を渡来する鷗たち。先着の鷗が安らく様を見て作者も安堵する。

八幡東　大塩ミヤ子
彼岸会の若き客僧ユーモアを交へて明るく仏法を説く
（評）ユーモアを交えて仏法を説く若い客僧とは。その場の空気が和まし。夾雑物が無くて引締まった。

吉留　白木うめの
向う田は早稲稔るらし夜明より時置きて聞こゆ爆音機の音
（評）晩稲は未だ、早稲の田からは早雀威しの爆音機の音がする。一、二句に独自性がある。

田熊　鷲頭かつ代
〝九電〟の長きフェンスを彩りて夾竹桃の花咲き盛る

東郷　藤崎　辰子
山寺の高き石段上りゆく芭蕉が曽良が踏みし石段

自由ヶ丘　後藤　君代
奉納の金額を彫るいしぶみに貨幣価値の推移思ひつつゆく

吉留　高山　信子
いく度のあらしに耐えし吾の住む明治の家の格子戸を拭く

八幡西　川崎　ウラ
バス降りて聳ゆる山に時折のホラ貝聞こゆ社あるらし

池田　小田　イセ
曼珠沙華くさむら中に咲き出でぬ無縁仏の花のごとくに

深田　中野　節子
水引草の赤き粒花ありありと老の眼に見ゆ秋たつ庭に

大島　目原　節子
夜の海にうつる電照の揺らぎつつおもむろにヨット浜により来る

名古屋　野崎　傅三
客の肩移り乍らに秋の蝿無銭乗車の旅を続けり

八幡東　岡本　初音
主なき隣の庭にひっそりと白きむくげの風にゆれをり

武丸　中村さつき
あどけなき幼児連れし難民に終戦直後の我が身顕ち来る

原町　八波　五月
蟋蟀もおんぶバッタも親したと草刈る我の肩にとび来る

鐘崎　安永　久子
祭壇の笑みみる義兄の写真よりその声今によみがへり来ぬ

八幡西　山田　耕夕
若き日に見し面影のすでになき赤間の街のバス停に佇つ

田久　立花　勇雄
朝日さす庭のコスモス咲きみだれ花ゆれやますそよ風の吹き

香椎　桜井　ツ子
きのふ刈りけふ焼く草の燃え立ちてほのほは澄め り五月の日なか

徳重　石松や寿子
崖に這ふ蔦の葉早も紅葉して中国山地の秋深みおり

朝町　井上ふじみ
喜寿すぎて我にも春はめぐりきぬ神のみ恵みひ孫の笑顔

武丸　立石ろせ乃
泡立草帰化植物は逞しくあき地ひづめて黄の花咲かす

大島　屋形トミエ
四百の船は御座船守りつつ玄界灘を波立ててゆく

池田　田しめの
夜来の雨やみて静もる四塚の杉の谷間に霧湧きあがる

戸畑　田中ハツセ
手伝ひの飾りし野草の花々に開業され御祖父の写真

第十八回 秋季奉納剣道大会

実戦形式の野試合で激戦

例年にない温暖な日が続く晩秋の十一月三日（金）、菊花薫る当大社境内本殿脇に於て、剣道連盟宗像支部の主催により、秋季奉納剣道大会が行われた。

当大社の奉納試合は、古来より行われて来た実戦の野試合形式をとり、昭和四十六年の遷宮を記念して発足した。当時は参加選手二百名たらずでしかなかった大会も、回を重ねるごとに大きくなり、十八回目を数える本年の大会には宗像地区最高剣士の栄誉を目指して、小学校一年の豆剣士から一般の男女剣士約七百名が、早朝よりぞくぞくと参集、会場は試合開始前に参加選手、引率の父兄で一杯となった。

剣道は礼に始り、礼に終ると言われる通り、日頃の腕白坊主も礼儀正しい作法ときびきびとした試合態度で臨んでいた。又ここ数年女子選手も年々増え、今大会も多数の女性剣士が男子に負けない気魄で対戦し、姉妹剣士の活躍等もあって大会を大いに盛り上げた。

当日は、早朝より夕刻迄熱戦が繰り広げられ、多数の父兄、参拝者からやんやの喝采を浴びて、「エイ」「ヤア」の気合満ちた掛け声で汗と埃にまみれながら奮戦、打ち合う竹刀の響が境内にこだまし、終日境内を大いに賑わせていた。

尚、当日の結果は左記の通りである。

〈男子の部〉

○小学校一年生
優勝　近藤瑞貴　赤間西
二位　西宏太郎　河東
三位　溝添　昭　赤間西

○小学校二年生
優勝　渡辺　武　赤間西
二位　和田悠一　岬
三位　西太一郎　河東

○小学校三年生
優勝　高尾浩樹　東郷
二位　松崎庄三　池野
三位　溝添　祐　赤間西

○小学校四年生
優勝　船木　悟　日の里東
二位　荒巻一史　神興
三位　小坪幸司　日の里東

○小学校五年生
優勝　香月洋一郎　日の里東
二位　浜田健児　玄海
三位　香月洋平　日の里東

○小学校六年生
優勝　井上豊継　玄海
二位　安松誠次　河東
三位　小門賢悟　神興東

○中学校一年生
優勝　柳瀬謙作　日の里
二位　永渕　章　河東
三位　川原亘平　自由ヶ丘

○中学校二年生
優勝　占部清和　玄海
二位　吉里光世　中央
三位　沖　大作　福間

○高校・大学
優勝　中嶋健一　福教大
二位　笠井康行　福教大
三位　宮田伸一　東海大五

○一般（男・女）
優勝　吉田敏数　東部
二位　重田義雄　東部
三位　原田英子　東部

〈女子の部〉

○小学校一・二年生
優勝　出光麻希子　赤間西
二位　吉田千沙子　東部
三位　義原真季　東郷

○小学校三・四年生
優勝　高岡統子　玄海
二位　古野真千子　南郷
三位　今村美紀　東郷

○小学校五・六年生
優勝　岩下朋美　自由ヶ丘
二位　藤井淳子　河東
三位　山内智子　玄海

○中学校
優勝　長谷川良美河東
二位　清水みどり河東
三位　田中美穂子河東

○高校・大学
優勝　岸原由佳　福教大
二位　広橋孝子　光陵
三位　本田恵子　宗像

宗像清文禰宜退任

当大社宗像清文禰宜が十一月七日付を以って退任致しました。

宗像禰宜は、大正十三年十一月七日に、当大社々家の長男として誕生され、県立宗像中学校（現宗像高校）卒業後、国学院大学専門部へ進学、同大学を経ていたんは教職に就かれましたが、「宗像家」本来の家職たる神明奉仕の道に就くべく、神宮皇学館研究科へ進まれました。

昭和三十二年、同館を卒業と同時に大阪住吉大社へ奉職、六年間同大社で奉仕、更には三年間の太宰府天満宮での奉仕の後、昭和四十一年四月一日付で当大社権禰宜に任ぜられました。

当大社奉職以後、昭和五十四年禰宜任命、二十四年の永きに亘り、祭儀部長・海洋分局長等の重責を全うされ、当大社の御神徳発揚に多大な功績を残されました。

特に地元出身の神職として、又一時教鞭をとっておられたこともあって、氏子の方々とは非常に親しく接しておられ、神社と地元とのパイプ役として、当大社にとりましてもなくてはならない存在であると共に、その明るいお人柄と博識は、神職・巫女達にとりましても将に人生の良き先輩であり、慈父のような存在でした。

退任後は、当大社末社氏八満宮々司として、又地元の鎮守七社の宮司をも兼務されるというお元気さで、斯界発展の為神明奉仕に尚一層精励されます。

禰宜退任にあたり、永年に亘り御厚誼を賜りました氏子崇敬者の皆様方に深く感謝申し上げますと共に、御本人の今後の益々の御健勝をお祈りする次第であります。

第十五回秋季奉納 吟剣詩舞道大会

境内には三千八百鉢の美事な菊花が咲き競う十一月三日、明治節の日に恒例の第十五回宗像大社秋季奉納吟剣詩舞道大会が、清香吟社（会長益中鵬山）の主催により、会員百余名参加の下、清明殿に於て午前九時より午後四時迄盛大に開催された。

今回は秋の奉納大会が始まってより十五回目を迎える節目の大会であり、数多くの詩吟・剣舞が披露されると共に参加者も例年にない盛り上がりをみせ、充実した大会となった。

特に清香吟社宗像本部会員総出演による構成吟「筑前大島」は、中津宮を中心にして大島の歴史を紹介する郷土色豊かなもので、その構成は、阿倍宗任伝説・足利尊氏と宗像氏との関わり・幕末の勤皇志士平野国臣の活躍・我国の命運をかけて戦われた沖ノ島沖での日本海々戦等からなり、宗像の歴史をリアルで迫力あるものとして再現、吟と剣舞を混えて披露されると、会場の観衆はこの素晴しい吟に我を忘れて聞き入っていた。

又三曲合奏も行われ、箏と尺八の絶妙な合奏による「光輝」の曲が奏でられると、会場はそれ迄とは打って変って華やかな雰囲気につつまれた。

更には本殿に於ても吟剣詩舞の奉納式が行われ、会長に合わせて会員一同が参拝、玉串拝礼の後、宗像本部の福家玉山先生により、「宗像大社を詠ず」が御神前で厳粛に吟ぜられ奉納されると、その美声が馥郁とした菊香漂う境内に響き渡り、折から参拝に訪れた人々を魅了させていた。

本年の大会も会員の皆様にて大変盛り上がりをみせた。

第十六回宗像本因坊戦

平成元年度本因坊に浅見六段

去る十一月五日（日）午前十時より当大社斎館・清明殿に於て、第十六回宗像本因坊戦が開催された。

この本因坊戦は、今年度の宗像地区囲碁界実力ナンバーワンを決める大会で、出場資格は宗像郡市内に居住する有段者に限られている。

当日は、この日を待ち続けていた囲碁愛好家百数十名が参加、五段以上の実力者による本因坊戦と、一般参加選手による有段者の部とが各々行われ、終日盤上での熱い戦いが繰り広げられた。

参加選手達は開会に先立ち本殿にてお祓いを受け、互に闘志を胸に健闘を誓い、合った。対局が開始されると、場内にはピーンと張り詰めた空気が流れ、一局一局火花を散らす対局が続いた。

本因坊戦の決勝戦は実力伯仲の浅見六段と山脇五段との対局となり、手に汗握る熱戦が展開され、観戦者も固唾をのんで勝敗の帰趨に注目し、会場の熱気も最高潮に達したが、遂に浅見六段に凱歌が上った。

尚、成績は次の通り

宗像本因坊
福間町　浅見　忠雄六段

準優秀
福間町　山脇　康孝五段

三　位
津屋崎町福永　雅通六段

〈〈〈

沖・中両宮秋季大祭斎行

全島挙げての神賑い

宗像大社沖津宮・中津宮（宗像郡大島村鎮座）両宮の秋季大祭が、中津宮境内に群生する珍樹ばくちの木の葉も清清しい、去る十月十三日・十四日（旧暦の九月十四日・十五日）の両日に亘り厳粛盛大に斎行された。

大祭日に先立つ十月八日、沖・中両宮の氏子奉賛会役員・翼賛会・敬神婦人部・農家の方々総勢三十余名が早朝より総出で、予め準備をした今年の新藁を選りすぐって〆縄作りに励まれ、中津宮の大シメ縄等大中小七十余の〆縄が完成した。さっそく中津宮本拝殿・神門の大〆縄を始め末社・鳥居等境内各所の〆縄すべてが取り替えられた。また十二日には、敬神婦人部の手により沖津宮遙拝所・御嶽神社の草刈り・清掃・鏡餅つきが奉仕され、翌十三日も早朝から神域の清掃・社殿の装飾幟立、仮設舞台作り、土俵固め等が奉賛会・村内協力委員の奉仕作業により準備万端整えられ、祭典をまつばかりとなった。

午後三時から中津宮境内をお護りされる地主祭が斎行され、同五時から中津宮と沖津宮遙拝所に於て宵宮祭が厳粛に執り行われた。

明けて翌十四日、午前八時半当宮境外末社の一つである宮崎区に鎮座の厳島神社の秋祭りが執り行われた。

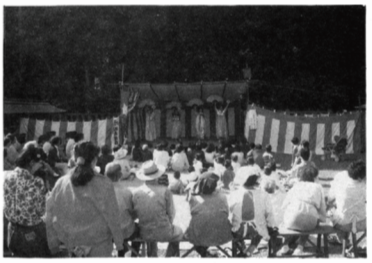
午前九時から沖津宮秋季大祭が岩瀬の沖津宮遙拝所に於て斎行され、修祓、宮司の祝詞奉上に続き、巫女による浦安舞が奏せられ、奉賛会・崇敬者の玉串拝礼が行われた。また同九時半から、当宮の唯一の境外摂社で大島の二二四メートルの山頂に鎮座する御嶽神社の秋祭も斎行された。

同十一時から、中津宮御殿で秋季大祭が斎行され、祭員・参列者一同が御神殿に一拝の後、修祓、養父宮司の祝詞奉上、沖西敏明氏子奉幣使の奉幣詞奉上、巫女二員による浦安舞が奏され、続いて氏子崇敬者の玉串が続き無事終了した。引続き照海殿に於て直会が供せられた。

また午後一時から本殿側の土俵では、大島小学校男女生徒・同中学校男子生徒による奉納相撲が行われ、中学校吉永先生の名行司により総当り、三人抜きの熱戦が続き、盛んな声援がおくられた。

一方境内に特設された舞台では、午後二時半より、村内各区より各々選ばれた芸達者等が続々登場して、歌や踊りの演芸大会が催され、参拝者観衆の万雷の拍手で大いに賑わった。

平成元年度の沖・中両宮秋季大祭も好天に恵まれ無事終了した。



「宗像大神に奉仕して」

―神務実習を終えて―

阿部和代

ご縁がありまして宗像大社のすぐ近くへ引越して参りましたのも二ヶ月程前になります。

今年の夏、東京で神職養成講習を受講し続いて指定神社の実習を当大社にて奉仕させていただきました。宗像の秋を彩る秋季大祭をひかえてのあわただしい折神職、巫女さん達の忙しさときたら休む間もないほどです。大祭は十月一日より三日まで斎行され、一日の「みあれ祭」は話にはよく聞いておりましたが実際に見るのは初めてで大漁旗などを飾った船団の華やかなパレードは何とも勇壮な海上神幸でした。またこの大祭は「放生会」と親しまれており、鳥・魚などすべての生きものをいつくしみ、あわせて海の幸、山の幸の豊穣を感謝する祭りで千年以上も受け継がれてきた伝統行事だそうです。

大祭期間中は風俗舞、流鏑馬神事、翁舞、浦安舞など連日多彩な神事が厳粛にして典雅に奉納され、また境内には露店が軒を並べ、お天気にも恵まれ祭りをいっそう盛り上げていたように思えました。

それから、ここのお宮は別名を「道主貴」とも申し上げ交通安全のご祈願が絶えることありません。その外結婚式、地鎮祭、竣工式、献茶祭などの祭典も見学させていただきました。

当大社ではコンピューターを導入し氏子、崇敬者の登録をし実態把握する上でも大いに役立ち、現代社会に即応したやり方に感心した私です。

最後に、この実習の一ヶ月間、お宮での年間行事の一部をかい間見ただけですが常にそこには神と人との交流があり、おごそかな祭儀が行われ感謝を捧げたり、祈願の場であったりするのです。たいへん有意義な一ヶ月間でした。職員の方々に深くお礼申し上げますと共に、今後も神のみこともちとして神明奉仕に励みたいと思います。

鐘崎漁業協同組合 城山浦水産業協同組合 姉妹縁組締結

民間レベルの交流に期待

日韓漁業新時代の幕開けを象徴する、宗像郡玄海町鐘崎の鐘崎漁業協同組合・組合長宗岡伊三・二五三人）と大韓民国済州道南済州郡の城山浦（ソンサンポ）水産業協同組合（組合長康有三・二五〇〇人）との姉妹結縁調印式が、十月二十一日（土）鐘崎漁協漁村センターで、日韓両国の関係者約百人が出席して執り行われた。

今回の姉妹縁組のきっかけは、当初玄海町が南済州郡との行政同士による縁組を検討していたことにある。しかし南済州郡はすでに和歌山県那賀郡と姉妹縁組をしていたため、町では民間レベルでの縁組を推進、昭和六十一年七月、韓国の漁業調査団が同町を訪れた際に、当時の城山浦水産業協同組合長も調査団の一員として鐘崎漁協を視察、その折相方の漁協同士による交流話が出たこともあって一気に機運が高まり、県・町も強力にこれをバックアップ、日韓親善協会などの支援もあって、全国でも初めての漁協同士による縁組締結が実現した。

縁組の目的は、一、漁業技術・情報の交換と研究、二、漁業関係者の相互訪問と研修交流、三、組合員子女らのホームスティ受け入れと民俗伝統文化の交流、四、漁船の遭難救助と緊急避難の協力、の四点で、漁業に関する交流だけでなく人的・文化的交流も深めていく。

両組合とも日韓漁業協定に基づく共同水域を主漁場としている上、城山浦水産業協同組合の所在地、城山浦邑と玄海町は同緯度に位置していること、済州道の潜水漁法である「海女」は日本では鐘崎が発祥の地とされているが、これは済州道から鐘崎へ伝わったものと考えられていること、又済州道に古くから伝えられている「いかだ船」は鐘崎の漁船の原形であるといわれていることなど、古代からの相互交流が行われていたと考えられるばかりでなく、現在でも鐘崎のふぐはえ縄漁船団が済州道近海で操業し、両漁協所属の船団同士が海上での交流を行っていることからも、今回の正式調印には関係者ばかりでなくいろんな方面から、大きな期待が寄せられている。

郷土史講座「海上民の里」開講

宗像大神を祀る総社鎮座の海神の里玄海町では、町教育委員会によって郷土史講座「海上民の里」が開講される。この講座は今月二十一日が一日目である。以後毎月第二、四火曜日に開かれ、平成二年三月二十七日に終了の、八回シリーズで行われる。ここでは、自分たちが住んでいる町や郷土宗像を、先人の生活を探りながら広く良く知り、歴史を振り返えりつつ、先祖の足跡を新らしい街づくりに役立てる試みとされているようだ。今回が〝ふる里海シリーズ〟の第二弾も計画されているという。講師陣は宗像地域在住で、考古・歴史・民俗・社会・風俗・一般などの研究者・教育者・有識者が第一とされている。

いっぽう、十月十四日宗像市久原の宗像ユリックスでは、海人シンポジュームが開催されている。ここでは民俗学者の、大林太良氏・谷川健一氏の両氏を中心とした九人の講師陣は、海神への信仰・海人族の生活・潮流などとによる、古代社会から現代までの歴史と習俗を講演により解説された。また参加者も加わったディスカッションで、終日約七〇〇名の参加者による海での生活を堪り起している。

宗像は、古来より海を生活の糧として生きぬいてきた人々の本拠であり、これを舞台に発展してきた土地であると言われて久しい。なかでも玄海町はその要衝の地である。現在もなほその息吹を感じさせる所である。この地は、古代の海人族の故郷として新たな脚光をあびている。ここで古代を感じながら現代をみなおしていこう。

―◇―

会場　玄海町役場会議室
時間　午後七時半～九時
※問い合せ先　町教育課社会教育係（電）0940(62)2111(内213)

社務日誌抄

十月一日～三日
宗像大社秋季大祭
十月一日　織幡神社祭
清水市宗像神社宮司丸尾恒雄氏外五十五名参拝
埼玉県宗像神社宮司藤田薫氏外四十五名参拝
米子市蓮華会佐々木恵美子氏外四十三名参拝
出光興産㈱総務部長渡辺茂太郎氏参拝
出光興産㈱釧路支店並釧路出光会参拝
太宰府天満宮・福岡海上保安部・宗像警察署・宗像ロータリークラブ・八幡宗像会・戸畑宗像会等参拝
テレビ東京「みあれ祭」取材
十月二日　筥崎宮・高良大社・鎮護寺・伊豆貴議・小山県議等参拝
十月三日　櫛田神社・滝口宗像市長・和田玄海町長等参拝
テレビ東京秋季大祭取材
十月四日　厚生省婦人労働局長佐藤氏・産業医科大理事長外三名参拝
玄海町中野行雄氏テレビ一台奉納
十月五日　縫殿神社祭
清香吟社福家宝山氏外四名来社
田島校区婦人部一八〇名境内清掃奉仕
十月六日　玄海町団参千人参り参拝
十月七日　出光興産㈱福岡支店神殿仮遷座祭・宗像綱宜外神職一名出向奉仕
岡山県立博物館学芸員白井氏来社
臨時職員会議
十月九日　玄海町消防団秋季大祭警備反省会
十月十一日　太宰府天満宮との懇親野球大会
NHKサービス田口氏・サントリー美術館々員来社
福間小学校・福間南小学校遠足にて来社
十月十二日　的原神社祭
出光石油開発㈱事業部次長栗田全教氏外一名参拝事務所安全並プロジェクト成功祈願祭斎行
福岡教育大学庶務課長松田恵治氏就任挨拶の為来社
日の里小学校社会科教育一四〇名来社
十月十三日　国税不服審判所長杉山伸顕氏・福岡国税不服審判所長西崎穀氏来社
出光光友会長安部正廣氏・同事務局長藤田齋一氏・出光興産㈱顧問久門敦氏参拝
十月十四日　沖・中両宮秋季大祭
取材
十月二日　筥崎宮・高良大社・鎮護寺・伊豆貴議・小山県議等参拝
十月三日　櫛田神社・滝口宗像市長・和田玄海町長等参拝
テレビ東京秋季大祭取材
十月四日　厚生省婦人労働局長佐藤氏・産業医科大理事長外三名参拝
玄海町中野行雄氏テレビ一台奉納
十月五日　縫殿神社祭
清香吟社福家宝山氏外四名来社
田島校区婦人部一八〇名境内清掃奉仕
十月六日　玄海町団参千人参り参拝
十月七日　出光興産㈱福岡支店神殿仮遷座祭・宗像綱宜外神職一名出向奉仕
岡山県立博物館学芸員白井氏来社
臨時職員会議
十月九日　玄海町消防団秋季大祭警備反省会
十月十一日　太宰府天満宮との懇親野球大会
NHKサービス田口氏・サントリー美術館々員来社
福間小学校・福間南小学校遠足にて来社
十月十二日　的原神社祭
出光石油開発㈱事業部次長栗田全教氏外一名参拝事務所安全並プロジェクト成功祈願祭斎行
福岡教育大学庶務課長松田恵治氏就任挨拶の為来社
日の里小学校社会科教育一四〇名来社
十月十三日　国税不服審判所長杉山伸顕氏・福岡国税不服審判所長西崎穀氏来社
出光光友会長安部正廣氏・同事務局長藤田齋一氏・出光興産㈱顧問久門敦氏参拝
十月十四日　沖・中両宮秋季大祭
十月十五日　月次祭
十月十六日　㈱出光美術館館長代理末松良介氏・同館長付秋村寛之氏・同事業課長阿久井長則氏外関係者献茶祭諸準備の為来社
十月十七日　献茶祭
表千家々元而妙斎千宗左宗匠奉納・出光興産㈱社長出光昭介氏外関係者・福岡県議会議員伊豆善也氏・表千家福岡同門会役員等参列
福岡市西花畑老人会八十名参拝
十月十九日　春日市教育委員二十名来社
十月二十日　出光興産㈱門司油槽所宗像神社秋祭・升谷権禰宜外神職二名出向奉仕
十月二十一日　大韓民国済州道城山浦水産業協同組合長康有三氏・鐘崎漁業協同組合長宗岡伊三氏外関係者二十名参拝
福岡県町村教育委員協議会一行十五名来社
十月二十二日　宗像地区商工会青年部一〇〇名菊展示ハウス建設作業奉仕
出光興産㈱福岡支店副支店長吉川洸氏来社
飯塚市立博物館長児島氏外五十名来社
十月二十四日　宗像地区中学校文化連盟美術部スケッチ大会一五〇名来社
十月二十六日　日本写真家協会員湯川晃敏氏来社
神宝狛犬撮影
神興東小学校遠足一四〇名来社
十月二十七日　NHK福岡アナウンサー島田稔氏外一名来社
十月二十九日　第十九回西日本菊花大会菊花搬入
十月三十日　文部技官中村順昭氏外四名重文一筆一切経調査の為来社
十月三十一日　太宰府天満宮権禰宜味酒安則氏来社文書収蔵施設視察

宗像大社歌会 俳句作品集(三二〇)

みあれ祭平成の風健やかに　津屋崎　井浦　良介

蟲の庭鳴く夜のしじま早寝せり　田　熊　安部　ゆき

池　田　小田しめの

虫の音の細りゆく庭薄紅葉　藤沢市　井上　玄洋

揺れ揺れて夜道を照らす芒の穂　福　間　広渡一寿軒

朝寒や冬着をさがす半裸体　福岡中央　力丸　玄風

ペン走る音の夜長や旅日記　田　熊　力丸　一郎

明月や妻追憶の今宵また　日の里　花田いつえ

抱く子の髪乱れ立つ神渡し　津屋崎　井浦　良介

白き鳥舞う塩田跡も冬近し　戸　畑　石田　昭子

鰯雲ひきつれてくる神事かな　小倉北　花田　茂子

十月の空張り通す浦祭　小倉北　吉元まさい

はじけては秋雲となる昼花火

浜の寄物 42

(続) 能登の漂着神 (四)

いしいただし

陽が沈む、祭りは最高に

日本海に突き出た半島へ対馬暖流が直接あたり、物も神も人も寄ってきたのである。今昔の話も、半島か大陸からの遭難と関係があろう。ここは漂着物の宝庫なのである。

さて五時には曳山と神輿が同時に動き出す筈だが、なかなか動かない。

遅れて政木家の横で、神事が行われ、それが終わると、神輿が動きはじめた。前の方に停ったままであった曳山も動きはじめた。

以前は砂浜を通っていたので、砂地に板を敷いて、それは大変なものだったという。

海岸道路から再び街中に入る。道路の中央には、一本の白い線が敷かれてある。よく見ると、白いのは塩であった。浄めの塩で、その上を曳山と神輿が通る。

御神像が三年仕えた升本家に神輿が停った。ここに御休所が設けられている。そこで神事を行い、人家が切れる街の端に出て、また反転をし、海岸道路へ出た。夕陽が沈みはじめる。堤灯が灯された。曳くもの、乗っている者、酒の酔いがまわり、それに見物客にも酒がふるまわれ、鐘や太鼓、掛け声と…クライマックスに達する、曳山や神輿は更にゆっくりとなる。

海に面した、街の中央部に幕が張られ、はりぼての鳥居や灯籠が置かれたところに神輿が安置された。人垣の間、二〇メートルほどを、三度ほど神馬を走らせて、今日一日の祭事は無事終了した。

その夜、各家で遅くまで、この祭りのために帰省した人達を囲んで、賑やかな談笑がつづく。

翌日は、日吉神社まで曳山は戻って、この祭事はおわる。

私は翌早朝、ここを去った。いまごろ、冬将軍の前ぶれで、北風が吹き、激浪が間垣を濡らしていることであろう。もうそこまで冬将軍が来ている。

能登はいつ来てもよいところである。今回の旅では季節的にも漂着物の最も少ない夏季であった。もう一度、冬に歩きたいものである。

話はここで、私事になって恐縮だが、十一月十七日から十二月二四日までの約一ヶ月・宗像市のユリックスで「海の漂着物展」を開催する。

今回は、規模も大きく、全国各地の漂着物を集めての展示だ。

島根県・美保神社からは、昭和初年に島根村野崎に漂着したラワン製の丸木舟を、出雲大社からは、願開船を展示してもらった。長さ四一センチ、幅一〇センチの小船で、中央部を細長く刳り抜き、寛永通宝十五枚を納め、差し込みで蓋をしたもので蓋の表には、出雲大社様、土佐本山助藤・寅年男、船体の舵のところに、天明※(一七八一)丑十月十七日と彫ってある。これが出雲の稲佐浜に漂着したものという。

福井県立若狭歴史民俗資料館からは、鳥浜貝塚出土の縄文時代前期、今から五千五百年前の漂着ココヤシを展示。日本最古の漂着物である。

次いで鳥取県立博物館では、本州では最初といわれるマンモスの臼歯を、山陰沖の網にかかったもので、漂着物ではないが、これを調べた信州大の亀井節夫先生は「中国あたりから死骸が漂着したのではなかろうか」という。

漂着オウムガイ十点の展示も珍しい。また参考出品として、オウムガイのアルコール漬け(市村道明氏)を展示してもらった。

これも参考出品だが、むかしインド洋の海岸に、まれに漂着し、大いに話題となったフタゴヤシは見ればみるほど奇妙な形である。世界にセイシェル島だけしかない。減多に見られない珍品で世界最大の種子でもある。

まだまだ色々と、こんなものが流れ着くのか…というものが多く展示されている。漂着物は海の持つロマンと共に、深い学問的な世界をも秘めている。是非、見学されんことを。

※宗像大社からも、ソロモン海域を漂流中を拾得された丸木舟を展示される。

宗像大社沖ノ島 沖津宮参拝記(二)

田川市稲荷町　寺崎　福美

沖ノ島は玄界灘に浮かぶ周囲四キロの小島で、断崖に囲まれ上陸はここ一ヶ所しかできないと聞く。そして古代より俗人不入の聖地として神々を祀り今日に及んでいる。また、古来海上交通の守護神として沖を通る船は、遙かに沖津宮に航海の安全を祈願し、近くの漁船は獲れた魚を神に献じて操業の安全と豊漁を祈り、御神水を戴いて再び漁に出るのを慣わしとしていると聞く。

また平成の現代まで女人禁制を固く守っているが、そのような所は全国にただ一ヶ所、この沖ノ島しかないという。人々が立ち入ることなく、不斧の地として斧を入れることがないため樹木は繁るに任せ、原生林の様相をそのまま止めている。また、暖流の関係で亜熱帯植物の北限地として熱帯性ビロー樹が繁茂し、天然記念物に指定されている。先に行われた学術調査では十数万点に及ぶ鏡・勾玉・馬具等古代の祭祀神宝或は弥生式土器などがそれも無傷のまま発見され「海の正倉院」と呼ばれていることは余りにも有名である。今でも大雨の後など落ち葉が流された後に、このような遺物を見付けることがあるらしい。

これ等の遺物はその多くは国宝に指定され、現在宗像大社の神宝館に展示され、一般に公開されている。

禊を終わり暫くたっても海水に濡れた下着はなかなか乾かない。仕方がないので気持ちが悪いけどそのまま着ていよいよ沖津宮に向かう。波止場から沖津宮まで一キロあるのか二キロなのか、胸突の急坂に自然石で石段を設けているが、私のように体力も脚力もないものは途中度々休まねば登ってゆけない。道の両側は自然の密林であるが、どんな樹々があるのか、どんな風景なのか、ゆっくり鑑賞する余裕は全くなく、ただ歩くことに一生懸命であったのが情けない。四・五十分も歩いた頃か沖津宮に到着、随分登ったような気がするけれども、この島の最高所でも二四三米メートルとか、元気なものなら大した高さではないのに情けないことだ。

十一時より現地大祭の祭典が執り行われた。宮司さんの捧げる祝詞の端々に「日本海々戦」という言葉が聞き取れたので、この大祭が日本海々戦の戦いの戦没者慰霊のためのお祭であり、従って海軍記念日の今日、五月二十七日に実施されるのも成程とうなづける。それにしては海上自衛隊の参拝がないのが淋しいと思うのは私一人だろうか。

日本海々戦は沖ノ島から眼下に見下ろす海域で戦われたのであり、その勝利が日露戦争を終結させた直接の要因になったのである。

祭典終了後付近の祭祀の跡など探訪する。「五号遺跡」や「岩陰の遺跡」「平地の遺跡」「岩上の遺跡」等と呼ばれる遺跡から多くの遺物が発見され、また付近にはその他多くの祭祀の跡があることを聞きながら、体力がないばかりに多くを見学することが出来なかったことが残念でならない。しかしその場所場所で宇都宮氏から詳しいご説明を戴きほんとうに有意義であったと心から感謝申し上げている。

以下次号へ続く

RKB文化セミナー 日本のこころを尋ねて むなかたの海辺と杜(もり)に (十)

渡部　昇一

いや、米ソの時代だと言うけれども、それも後半であって前半はそんなもんじゃなかった。となると私は二十世紀は日本の時代であったと言ってもいいんじゃないかと思うんです。これは野郎時代的な言い方ですけれども、ある見方をすれば二十世紀、この世紀は日本の世紀であったと言ってもよろしいと思います。たまたま今上陛下(昭和天皇)は一九〇一年生まれでいらっしゃいますから、丁度世紀の初めにお生まれになられた。

じゃ何故そんなことが言えるかというと、二十世紀の初め頃の世界的に一番大きな事件、大事件と言ったら、これは誰が何と言ったって日露戦争です。何故かと言うと、世界史の流れからみますと、コロンブスの頃から始まりましてずーっと世界の流れは、白色人種が有色人種の住んでいる所に入り込んで行って植民地にした、この歴史です。ずっとその流れです。それがだんだん速くなりまして、十九世紀になりますと、ロシアなんかは一年に獲得した面積が、ヨーロッパの国一つ分位の速さで広がってるのもあります。イギリスがそういう時期もあります。ものすごい速さで白色人種以外の国を取って行った。これがこの数世紀の流れだったわけです。

ところがそれが二十世紀の初め、日露戦争これは一九〇四年と五年ですから、まあやっぱり初めですね、これでぴたっと終ったわけです。何世紀間の流れ、白人が有色人種の土地を取る、植民地化するという流れがその時でぴたっと止まったわけです。しかもその止まり方が非常にはっきりしておったわけですね。

当時白色人種に犯されない有色人種の国というのはアフガニスタン、これは山ばっかりで苦労して取る程のこともないというのが一つありまして、それからアフガニスタン人は大分頑張りました。それでこんなに手こずるなら止めようというようなことで、あそこは独立をかろうじて保っておったんですね。タイ国はどういう訳かとり残されまして、中国はご存知のように虫喰ったように租界で取られておったんですね。租界というのは大都市の一番いい所を外国人が居住地として取ることです。それがたとえば上海のイギリス租界だとか各都市にあるわけです。それから青海なんていうのは半島の港あたり全部がそうです。香港もそうですし皆そういう風に取られておったんですね。

そして最後に、本当に残ったのは日本だけだったんです。その日本が完全に白人の使う武器で、白人がやる戦争のやり方で、世界最強の陸軍国ロシアをこれは陸上で完膚なきまでに叩き潰し、海上ではこれもまた世界の二・三を争う大海軍、これを残らずと言ってもいい程日本海に、沖ノ島の沖ですが沈めてしまった。これでもう白人の世界は終ったんですよ。

でこの終ったことを日本人だけが言うのなら迫力ないんだけれど、それからまもなくしてイギリスのタイムズ社が出した「ヒストリアンズ&ヒストリー」歴史家の歴史叢書という大叢書があるんですが、歴史の世界史の、一尋以上あります。その中でこの日露戦争の所を見ますと、この日露戦争によってもはや白人は他の有色人種の土地を、ケーキを切るように別けることは出来なくなったと言っているんですね。ケーキを切るように別けることが出来なくなったというのは面白いですね。

あのアフリカの地図をご覧なさい。もう国境が綺麗に切ってあるでしょう、ケーキを切るように切ったんだから。アメリカの州を見て下さい。アメリカの州だって綺麗に切ってありますよ。あれもケーキを切るように切ってあります。東経何度から何度迄、シュッとこう切っているわけです。それはインディアンが住んでいようが一向おかまいなしにね。アフリカでもいろんな種族が住んでいますが、おかまいなしにケーキみたいに切っているんです。それがもう出来なくなったほっきり書いていますね。

それが日露戦争、ですから日露戦争の勝った年に、それ迄ロシアに押えられておったフィンランドが、初めてフィンランド議会が独立しました。それからインドだとかトルコだとか、それこそそれ迄植民地化されたり、されかかって悩んでいた諸国家の人達はどの位インスピレーションというか、励ましを日露戦争から受けたかは、これはよく知られているとろです。

次号へつづく